

Title	日本の初等中等教育を受けたフィリピンにルーツを持つ子どもたちの「困難さ」
Author(s)	矢元, 貴美
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61421
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (矢元貴美)

論文題名

日本の初等中等教育を受けたフィリピンにルーツを持つ子どもたちの「困難さ」

論文内容の要旨

本論文は、日本で初等中等教育を受けたフィリピンにルーツを持つ子どもたちに焦点を当て、エスノグラフィーの手法を用いて、彼らの「困難さ」を明らかにするものである。言説として困難だと語られたものを困難とし、子どもたちの困難さの言説を通して、困難さの状況、困難さの心情、困難さの状況における行動とその後の経緯という困難さの3つの側面と、彼らに特有の困難さの要因や困難さへの対処の特徴を考察することを目的とする。本論文では、両親または一方の親がフィリピン国籍を有するか、フィリピン出身である子どもを「フィリピンにルーツを持つ子ども」と呼ぶこととする。そのうち本論文では、中学生以上の年齢に相当し、日比両国または日本のみでの学校生活を経験した人で、日本の公立・私立学校で学んでいるか、学んだ経験のある人を対象とする。

主に韓国・朝鮮にルーツを持つ子どもや海外・帰国子女に関する課題が取り上げられてきた、外国にルーツを持つ子どもの教育課題は、ニューカマーの子どもの増加に伴い、日本語や日本の学校文化に馴染みのない子どもに関する課題へ移行した。教育課題に対応するための施策の多くは同化・適応施策であり、課題は残されたままであった。

外国にルーツを持つ子どもたちが日本の学校で直面する困難さは、日本人の子どもたちに同化したり、日本の学校教育に適応したりすることの困難さを中心に議論されてきた。困難さが個人の能力や資質に還元されることや、日本の学校の同化主義への批判がなされ、社会制度や子どもの社会関係に帰する研究が行われてきた。困難さの語りと原因が検討されてきた一方、困難さの3つの側面は十分に着目されてこなかった。フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難さの背景や要因にはフィリピンの価値観があることが指摘されてきた一方、彼らが困難さに対処しているのかは検討されてこなかった。本論文は困難さの3つの側面を検討することにより、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの研究に新たな視点を提供するとともに、フィリピンにルーツを持つ子どもたちの視点を加える。

本論文では方法論および調査結果の記述方法としてのエスノグラフィーを採用し、インタビュー調査と参与観察を実施した。子ども自身の視点を重視するが、保護者と、教育現場で子どもたちの支援に携わる人の視点も取り入れる。

インタビュー調査は2011年11月から2016年5月にかけて実施した。フィリピンにルーツを持ち日比両国または日本のみで初等中等教育を経験した「子ども」、公立小・中・高・特別支援学校で彼らを支援する「サポーター」、フィリピンにルーツを持つ子どもに日本の初等中等教育を受けさせたことのある「保護者」の3つのカテゴリーに該当する人を対象とした。調査協力者は合計54名であるが、複数のカテゴリーに該当する人がいるため、延べ61名である。

参与観察は2013年1月から2016年2月にかけて、フィリピンにルーツを持つ生徒が多数在籍する公立高校において、筆者も運営に携わる、母語や母文化の保持を目的としたフィリピン語の授業を中心に実施した。さらに、フィリピンにルーツを持つ障がい児の社会関係を把握する目的で、2013年8月と11月および2014年11月に石垣島と沖縄本島において、教員、母親、事業所の職員らへのインタビュー調査、および小学校とカトリック教会での観察も実施した。

本論文は序章から第9章までで構成されている。第1章から第9章の概要は次の通りである。

第1章では社会的背景として、日本で暮らす外国にルーツを持つ子どもの人数、彼らに対する教育の歴史の変遷と教育政策・施策上の課題、およびフィリピン人の海外移住の状況を整理する。第2章では先行研究を検討し、本論文の課題と目的、意義と特色を述べ、用語の定義および範囲と制約を示す。第3章では方法論的枠組みを提示する。エスノグラフィーを採用する利点を述べた上で、具体的な調査方法の概要、調査協力者の概要、および分析方法を説明する。さらにフィリピンにルーツを持つ子どもたちのフィリピンにおける教育的背景を述べる。

第4章では、フィリピンにルーツを持つ子どもたちへのインタビュー調査および高校での参与観察に基づき、彼らが日比間を移動する経験が多様であること、日本の学校教育で直面した困難さと日本の学校教育に対する考えを明らかにし、彼らが考える日本の学校で学ぶ困難さと、日本の学校教育に対する評価の特徴を、他の国へ移住したフィリピンにルーツを持つ子どもたちが直面する困難さや、日本で暮らす他の国にルーツを持つ子どもたちの困難さとの比較を通して考察する。彼らは学校生活における人間関係構築や学習上、高校進学上の困難さ、親子関係における困難さ

を経験しており、教員や友人らの手助けを受けて困難さを乗り越えてきた。一方、経験や背景を活かし、自分自身で積極的に行動することで自身の状況を好転させ、日本社会が持つ特性も柔軟に取り入れている。

第5章ではサポーターが考える、フィリピンにルーツを持つ子どもたちが学校で経験する困難さや日本の学校教育の課題を明らかにした上で、サポーターが考える子どもたちの困難さの要因、およびサポーターが直面する困難さの要因を考察する。サポーターらは、国家間を移動した子どもたちは自らの意思によって移動したわけではないということ、そして日比の価値観や日本語とフィリピン語の間で揺れ動いていることが困難さに直面する要因であると考えている。サポーターが考えるサポーター制度や日本の教育の課題は、サポーター自身が職務上抱える困難さの要因であり、サポーターが置かれている立場は学校内での子どもたちの重要性をも表している。

第6章では保護者の日本での子育ての困難さと、保護者が考える子どもが日本の学校で直面する困難さ、日本とフィリピンの教育に対する考えを明らかにし、その特徴をフィリピンの価値観や親子関係の視点から考察する。保護者らは子育てにおいて、言語や制度や慣習の違いによる困難さと言語や文化の継承についての困難さを経験している。子どもにフィリピン人のアイデンティティーやフィリピンの言語や価値観も持ち、日比両方の価値観を大切にしてほしいと願っているが、子どもに強制せず、臨機応変に対応し、自らも両方を尊重しようとしている。

第7章では、困難さを経験しつつ、日本で高校を卒業したフィリピンにルーツを持つ子どもたちが中等教育修了後の進路を選択した理由を明らかにし、その特徴を考察する。進路選択の際に国際的な経験や言語能力の優位性を積極的に活用した人がある一方、消極的に活用した人やあえて活用しなかった人がおり、どのように活用するかに違いが見られる。彼らの選択には迷いや揺れも伴うが、社会が求めているものを見極めた上で進路を選択している。

第8章ではフィリピンにルーツを持つ障がい児の社会関係の特徴を考察する。石垣島に暮らす男子児童は複数の場で年齢、国籍、所属の異なる人たちとの人間関係を築いており、彼が関係を築いている場にはルーツに重きを置かれている場と置かれていない場がある。頼れる人や頼れる場を複数持っている状態は自立にとって望ましい状態である。

第9章では、第4章から第8章で語られた子どもたちの困難さに焦点を当てて考察する。彼らが語る困難さの言説を通して、彼らが直面する困難さとサポーターや保護者が考える子どもたちの困難さの共通点や相違点を検討する。続いて、フィリピンにルーツを持つ子どもたちに特有の困難さの要因や困難さへの対処の特徴を考察する。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちが困難さに言及する際によく使用するフィリピン語の表現には「*hirap*」および「*lungkot*」とそれぞれの派生語がある。一方日本語では「大変だった」、「困った」、「問題だった」といった表現や、「イヤ」、「驚いた」、「寂しかった」といった感情表現で困難さを説明している。彼らによる困難さの語りには、困難さの状況、困難さの心情、困難さの状況における行動とその後の経緯、といった3つの側面があり、3点は個別に独立して存在するわけではなく、相互に関連している。また彼らは困難さと困難ではないものを同時に経験している。

サポーターらは、国家間を移動した子どもたちが親の意思によって移動を余儀なくされていることが大きな困難さを生み出しており、子どもを「犠牲者」と捉える傾向がある。一方、子どもたちは家族の犠牲になっているとは考えておらず、葛藤しつつも困難さに耐え、家族のためになることとして受け入れている。子どもたちはまた、日本とフィリピンの価値観で評価できる部分とできない部分があることを認識し、文化間・言語間での揺れの原因を理解した上で、評価できる部分は取り入れ、評価できない部分も受け入れている。

子どもはフィリピンにルーツを持つことが原因で生じる困難さを抱えている。一方で保護者らは子どもにフィリピンの言語や価値観を継承してほしい、日比両方の価値観を大切にしてほしいと願っている。それゆえ、子どもは親の希望を叶えようとすれば学校では居心地の悪さを経験し、親は子どもの困難さを解消しようとすれば自身の希望を叶えることができず、両者ともに、どちらか一方しか叶えることができないというジレンマを抱えている。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちは、生活の場を日本、フィリピン、またはアメリカなどの第三国のどこに置くのかといった国の選択肢のほか、どの言語を活用するのかという言語の選択肢も持っている。ある選択肢が閉ざされたとしても他の選択肢から選べることは彼らの優位性である。また子どもたちの中には日本の言語や習慣や価値観に抵抗・反抗した人もいるが、好ましいと考えたものは取り入れてきた。彼らが日本社会の特性を柔軟に取り入れて暮らしているということは困難さを解消または緩和することにつながっている。

本論文ではフィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難さの言説に寄り添い、困難さの3つの側面および、困難さと困難ではないものについて論じ、彼らに特有の困難さの要因や困難さへの対処の特徴を考察した。また子どもたちが直面する困難さとサポーターや保護者が考える子どもたちの困難さとの間に齟齬があることも示した。本論文はフィリピンにルーツを持つ子どもたちの経験を困難さという枠組みで捉えることにより、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの研究に新しい視点を提供することができた。フィリピンにおいて、日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもたちに対して抱かれる「幸運な」子どもたちという見方に一石を投じたという点でも意義がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (矢元 貴美)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 中村 安秀
	副 査 教 授 澤村 信英
	副 査 教 授 宮原 暁

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本で初等中等教育を受けたフィリピンにルーツを持つ子どもたちに焦点を当て、エスノグラフィーの手法を用いて、彼らの「困難さ」を明らかにすることを目的とした。本論文では、両親または一方の親がフィリピン国籍を有するか、フィリピン出身である子どもを「フィリピンにルーツを持つ子ども」とした。従来、外国にルーツを持つ子どもたちが日本の学校で直面する「困難さ」は、日本人の子どもたちに同化したり、日本の学校教育に適応したりすることの「困難さ」を中心に議論されてきた。

本論文ではエスノグラフィーを採用し、高等学校におけるフィリピン語講師としての参与観察と2011年11月から2016年5月にかけてインタビュー調査を実施した。フィリピンにルーツを持ち日比両国または日本のみで初等中等教育を経験した「子ども」、公立小・中・高・特別支援学校で支援する「サポーター」、子どもたちの「保護者」を対象とし、調査協力者は合計54名であった。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちによる「困難さ」の語りには、「困難さ」の状況、「困難さ」の心情、「困難さ」の状況における行動とその後の経緯といった諸相があり、3点は個別に独立して存在するわけではなく、相互に関連していた。サポーターらは、国家間を移動した子どもたちが親の意思によって移動を余儀なくされていることが大きな「困難さ」を生み出しており、子どもを「犠牲者」と捉える傾向があった。一方、子どもたちは家族の犠牲になっているとは考えておらず、葛藤しつつも「困難さ」に耐え、家族のためになることとして受け入れていた。保護者らは子どもにフィリピンの言語や価値観を継承し、日比両方の価値観を大切にしてほしいと願っている。それゆえ、子どもは親の希望を叶えようとするれば学校では居心地の悪さを経験し、親は子どもの「困難さ」を解消しようとするれば自身の希望を叶えることができず、両者ともにジレンマを抱えていた。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちは、生活の場を日本、フィリピン、またはアメリカなどの第三国のどこに置くのかといった国の選択肢のほか、日本語を活用するのか、英語を活用するのかという言語の選択肢も持っている。複数の選択肢を持つことにより、「困難さ」を解消することにもつながっていた。また、フィリピンにルーツを持つ子どもたちが、日本社会の特性を柔軟に取り入れて暮らしていることで「困難さ」を緩和することにつながっている場面も少なくなかった。

本論文ではフィリピンにルーツを持つ子どもたちの「困難さ」をフィリピン語・英語・日本語による数年にわたる重層的なインタビュー調査から明らかにし、子どもたちに特有の困難さの要因や対処の特徴を考察した。また子どもたちが直面する困難さとサポーターや保護者が考える子どもたちの困難さとの間に齟齬があることも明らかとなった。本論文は、国際協力やフィリピンに関する学問分野において、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの研究に「困難さ」という新しい分析の視座を提供することができたという点において、大きな意義が認められる。